

ドラマに登場する「英語で生きたい日本人女性たち」(2)

小 林 葉 子

はじめに

本稿と小林(2018)は2部構成となっている。小林(2018)では「小説に登場する「英語(圏)で生きていきたい日本女性たち」として、2冊の小説を取り上げた(篠田 節子, 2000; 清武 英利, 2016)。本稿の前半では、小林(2018)では紙面の都合上割愛した「日本人女性と英語」研究概観を行う。後半ではNHK連続TVドラマ「花子とアン」とNHK放送「国際共同制作ドラマ」「Oh Lucy!」を取り上げながら、「英語と日本人女性」についてさらに考察していく。

「英語圏在住の日本人女性」研究概観

「日本人(女性)」全体から見れば、英語学習に投資をし続けている女性たちはかなりの少数派である。(準)英語圏にて英語を使って働いている日本人女性たちとなればその数は非常に限られている。たとえ英語圏という枠を外し、「海外で働いている日本人女性」と定義を広げたとしても日本在住の「日本人(女性)」と比べれば微々たる存在である。また、そもそも「海外で働いている日本人」は圧倒的に男性のほうが多い。ところが学術図書や論文を見る限り、特に海外の研究者たちの興味は海外で働いている(または勉強している)日本人女性にあり、彼女たちに焦点を当てた文献のほうが圧倒的に多い。何故だろうか。

まず日本人女性に限らず、海外にいる外国人女性の経験に注目する傾向がある。語学留学したアメリカ人白人女性や黒人女性はその外見ゆえに性的な視線を浴び、声を掛けられると報告されている(Ehrlich, 2001; Talburt & Stewart, 1999; Twombly, 1995)。また女性の場合はファッションや化粧などの点で、同じ外国人男性よりも注目度が高くなるという。ニュージーランドの最大都市オークランドには東アジアから多くの学生が語学留学目的で滞在するが、若い東アジア人女性に必要な店(美容院、化粧品店、衣料店)の増加とともに関連報道が増え、中には人種的嘲りが見られるものもあるという。Collins(2006)が考察した、ニュージーランドで唯一の全国雑誌に掲載された記事(Philp, 2001, p. 19)はその一例である。その記者は街の東アジア人女性学生を揶揄してこう書いている:「化粧は完璧。完璧なまでにやりすぎてまるで意図的に失敗したようなメイクだ。ヘアスタイルは劇場役者。これまた人目を引くために凝りすぎて、まるで50年代に流行った映画に出てくる気取りきった役者もどきだ」(筆者訳)。

次に欧米人(研究者)の間では「日本人女性が抱く欧米へのあこがれ」が事実として理解されているため、彼女たちのほうに自然と視線が向くようである。つまり、男尊女卑のひどい日

本社会から逃れてきたかわいそうな日本人女性たちを気にかけてあげなければ、といういわゆる「オリエンタリズム」(Said, 1979)の同情的かつ差別的な視線である。そうした視線はバンクーバーで起こった「アジア人女性留学生」連続レイプ事件を報道した記事にも見られる(Park, 2010)。記事を分析した論文によると、韓国人や日本人女性たちが男尊女卑社会の出身で、「レイプ」は犯罪であるという欧米での常識観を持っていないため、「犯罪」に遭っても黙っていると記事は指摘した上で、論調には無知なアジア人女性たちを守ろうという白人の道徳的・保護者的優越感とアジア人(男性社会)への他者的・侮蔑的視線があると指摘している。

さらに英語圏に渡航する日本人に限って言えば圧倒的に女性のほうが多いため、自然と街のあちこちで見かける彼女たちに視線が行くということも十分考えられる。具体的な数値を紹介したい。筆者は2007年、カナダ都市部の評価の高い英語語学学校計5校で現地調査を行った(Kobayashi, 2018aに5章として掲載)。そのうちの1校は北米複数の都市に校舎を持つ大規模校だった。その責任者から提供された10年間の学生データによると、在籍学生数の多い上位の国、ドイツ、ブラジル、スイス、韓国、メキシコ、日本、台湾からの留学生のうち、日本と台湾だけが過去10年間に渡り、女性留学生が7割を占めていた(男-女%:日本 26.9-73.1, 台湾 27.8-72.2)。一方、日本と台湾以外の国は男女比がほぼ半々であった(男-女%:ドイツ50.3-49.7, ブラジル50.1-49.9, スイス49.7-50.3, 韓国 47.3-52.7, メキシコ42.2-57.8)。ちなみに中国からの学生が上位に入っていないが、授業料が高めのためヨーロッパや日本などからの学生が上位を占める、とのことであった。もちろんこの学校でも現在では上位国のランキングも変わっているだろう。

日本人社会人女性の英語学習投資の理由

このように「グローバル言語」の英語を学ぼうという若者が男女ともに世界各地から英語圏に渡っているにも関わらず、日本(と台湾)は女性の割合が圧倒的に多い。しかも次節で考察するように、日本社会では「使う」ための英語学習を期待されるのはビジネス「マン」であり、女性ではない。しかし彼女たちはそれでも自費で英語学習に投資を続ける。何故なのか。

80年代から20年ほどの間現地で多く見受けられたのが、個人でMBA留学を目指す社会人女性たちであった。90年代前半の調査結果をまとめたOno & Piner (2004)が示すように、期間限定のOLとしか扱われない日本の職場から抜け出すため、キャリアアップ、転職、海外就職のために女性たちが考えた打開策はMBA取得などを目的とした海外留学であった。

しかし長期的な不況のなか、こうした社会人女性は減ってきている。逆に増えているのが、同じく自費ではあるが短期で、元々英語力も低く、留学動機も「自分へのご褒美」など、曖昧な日本女性である。拙稿(Kobayashi, 2007)で取り上げたが、会社を辞め半年以上の語学研修をしているにも関わらず、英語力は初級クラスでもついていくのが難しいレベルで、帰国後はキャリアアップを目指すわけでもなく再度就職をしつつ、英語学習を続ける気持ちはない、という日本女性たちは英語圏語学学校では稀有な存在ではない。彼らはMBA留学やビジネス英語クラスで必死に努力する日本人女性たちとは異なっているし、遊び目的でやってくる中国など新興国の富裕層息子とも、大学や企業からの派遣で渋々来ている日本人男子学生ともビジネスマンとも違う。目標は曖昧で、英語力はたいして伸びず、それでも「いい経験だった」と帰っていく彼らに対する現地スタッフからの視線は複雑である。

英語を学ぶ日本人女性に対する批判的眼差し

対照的な存在の日本人女性たちもいる。シンガポール、アメリカ、ロンドンなど海外で就職している独身女性である。彼女たちについての研究報告は和文論文(中澤 他 2008; タン・合田・マクラーチュアン 2008)や英語論文(Ben-Ari & Vanessa, 2000; Clark, 2006; Iwao, 1993; Sakai, 2000; Thang, MacLachlan, & Goda, 2002)として発表されている。こうした論文なら「日本人女性たちは単身海外でがんばっていてすごいぞ」と女性たちを褒めてくれるのかと思いきやそうでもない。それどころかどちらかという批判的である。

例えば、小林(2018)で取り上げたノンフィクション作品の舞台(清武 英利, 2016)でもあり、独身日本女性の就職先として人気・需要があるシンガポールでは、雇用条件の不安定さも手伝い、日本女性たちは仕事に不満があったり飽きてくると、すぐ転職をしたり、帰国してしまう特徴があるという(Thang, MacLachlan, & Goda, 2002)。また別の研究者たちは、彼女たちが海外で現地就職ができ、国境をまたいで職場を渡り歩くことができるのは努力や能力の結果ではなく、そもそも日本でも海外でも彼女たちが「周辺部」の人材(marginals)でしかないからだ、と指摘した上で、彼女達が他の日本人女性たちのロールモデルになるには限界がある、と批判的に論じている(Ben-Ari & Vanessa, 2000)。また、アメリカの日系企業に4年間働いたアメリカ人女性研究者はその内部告発的報告を'Sara Clark'という匿名で発表しているが、雇用主である日系企業が違法な男女雇用差別を行っている職場でも現地採用の日本女性たちはそれを訴えることはしないと批判的な考察をしている(Clark, 2006)。その企業では英語力も学歴も格段に高い日本人女性を契約社員として雇う一方で、現地日本料理店でバイトをしていた日本人男性を現地採用し、5年以内に管理職的な仕事を任せてしまっていたにも関わらず、女性たちは抗議をせず、「男性を喜ばせる」役割を従順に果たしている、と'クラーク'は批判している。

男性優位の日本企業文化を嫌い、キャリアを求めて日本を離れたはず女性たちが、結局は海外日系企業で現地就職し、本社からやってくる日本人男性駐在員の下で働き、不満があると仕事を辞め、プライベートでは日本人女性たちと過ごす。または「女子力UP」「自分探し」「プチ留学」「自分へのご褒美」のために英語圏へやってくる渡航理由は現地スタッフにとっても海外研究者にとっても簡単に共感できるものではない。男性たちに比べると日本の社会人女性たちの自主的英語投資熱は明らかであるが、海外研究者による「英語学習者としての日本人女性」に対する見方は、今後も批判的論調を軸として構築されていく傾向が続くであろう。

「日本人男性と英語」研究概観

研究者の間では「日本人女性が抱く英語・欧米へのあこがれ」については関心もたれているが、日本人男性の消極的な英語学習態度というテーマへの関心は薄い。欧米人(白人)男子生徒たちを対象として研究も同様の傾向が見られ、研究成果が少ないが、それらをここでは簡単に紹介したい(Carr & Pauwels, 2006; Henry & Apelgren, 2008; Williams, Burden, & Lanvers, 2002)。まず同じ英語ネイティブでもエリート男子校に通う子たちは海外旅行経験が豊富で、ビジネスでの外国語の重要性を認識しているため、外国語学習に対して前向きである。一方、中流階級以下の男子生徒たちは外国語学習に消極的である。その大きな要因は男女ともに抱いている「外国語学習は女子のすること」というイメージである。以下はイギリス人

白人女子生徒の意見である：

男子は外国語が好きじゃないのだろうけど、好きだとしてもそう見せたがらないの。女子の多くは外国語が好きだから、好きだってことを見せることを気にしないのかな。男子と違って、外国語が好きじゃないってふりをしないから。(イギリス人白人女子11歳)(Williams, Burden, & Lanvers, 2002, p. 516) (筆者者訳)。

ただし難しいというイメージと実益に結びつきそうな外国語に対しては男子たちの動機づけが高まるらしい。例えば、オーストラリアの教師たちによると、文字表記が西欧語と大きく異なる日本語や中国語は認知的に難易度が高いというイメージが持たれているせいで女子よりも男子の受講生が多いのだという (Carr & Pauwels, 2006, p. 143) (いずれも筆者者訳)：

男子生徒たちが日本語に興味を持つ理由の一つは文字のせいです。チャレンジになりますから。解読が必要になって難しいわけです。女子たちは日本語の文字にどうしていいかわからないとやめていきます。

中国語のクラスに女子よりも男子のほうが多い理由のひとつは視覚的そして論理的志向の強い学習者に中国語が合っているからです。文型という問題に取り組んだりしますが、男子生徒のほうが興味をもちます。帰納的学習が出来ますから。

またイギリス人男子生徒の場合は「愛」や「フェミニン」のイメージが強いフランス語よりも「男性的」なドイツ語学習への動機づけのほうが強くなり (Williams, et al., 2002), スウェーデン人男子生徒たちは「国の将来」のために英語以外の第二外国語を学習することの重要性をより強く意識している (Henry & Apelgren, 2008), といった結果が報告されている。

日本でも「外国語」であり「女子向け」の英語を必要以上に学ぼうとする日本人男子は少ない。さらに英語圏と似ている点だが、日本でもモノリンガルであっても就職に困らない、という点が外国語学習意欲に大きく影響する。「外国語学習は女子のすること」という社会的価値観があり (Kobayashi, 2002), 同時に外国語運用能力の低さが就職の不利にならない、ということになれば、男子たちが外国語学習に本気になるための動機が限られてくる。非英語圏では男女問わずに多くの若者が「グローバル言語・英語」力を高めようと努力をしているが、冒頭で紹介したように日本人学生の場合はその努力をしているのは圧倒的に女子が多い。

こうした事情は欧米圏語学学校スタッフも認識している。本稿冒頭で紹介したように、筆者はカナダの主要都市にある知名度の高い語学学校複数にて調査を行ったが、現地スタッフたちは日本が男性優位社会であり、男性であれば英語力がなくとも就職が不利にならない上、日本企業は雇用した後にビジネス「マン」やエンジニアたちのみに語学研修の機会を与える、という認識を語っている (Kobayashi, 2012, 2018a)。大規模語学学校チェーン校のカナダ人白人男性責任者は「自分だって日本人男性に生まれていたら英語なんて勉強しない」と断言した：

従業員たちに英語力があることを大企業たちが要求し始めない限り、英語を学習する必要なんてないですよ。もし私が(日本人)男子大学生で、英語をしゃべることが出来ようができてまいがちゃんと単位さえ取ってれば就職できると分かっているとしたら、英語なんてわざわざ勉強しませんよ。(中略) 実際、日本の会社は相変わらず雇った従業員たちを

つかまえて、「君の英語はあまりよくないなからカナダに行って勉強してこい」と言っているわけです。賢い日本人（男性）大学生たちは英語の勉強はしないですよ。「ほら、（カネと時間を出すから）カナダで英語を勉強してこい」と就職先から言われるまではね。

また有名大学付属語学学校コーディネーター兼教師（白人女性）が長々と愚痴をこぼした点だが、日本の一流国立大学から集団研修として毎年やってくる経済／法学部の男子学生たちの場合、他の国のエリート大学生と比べて、大学入学時点での英語力が相当低い上に、（学生の間は）「英語はやめる」という選択肢があるため、せっかくの成長の機会を生かそうとしないのだという：

自分たちの英語力の低さにショックを受けるのだと思います。彼らは「自分たちはものすごくいい大学からやって来ているし、英語は学校ですっと勉強してきた」という思いでやってくるわけです。（中略）だから思っていたほど英語が出来ないという事実を受け入れて認めることにもものすごくためらいがあるのです。だから「わー、英語を勉強しなきゃ」と思うのではなく、「じゃあもうやらない」となるわけです。そしてそういう学生たちが相当な数いるので、彼らの多くは同じ（低いレベルの）クラスに集まってしまうのです。

「外国語学習は女子のすること」という社会的価値観とともに、日本社会では英語の運用能力の低さが就職の不利にならない、という事実は日本の主要ビジネス雑誌からもうかがえる。『プレジデント』『東洋経済』『ダイヤモンド』『日経アソシエ』は年に1回程度「英語学習」特集を組んでいるが、主要ビジネス雑誌が英語学習を企画すること自体が、他の国のビジネス雑誌には見られないことであり、日本での就職と昇進では英語力が問われない証拠といえる（なお、『日経アソシエ』は2018年9月号を最後に休刊となった）。以下にそうした雑誌の表紙を飾る文言を上から下の順序で記す（フォントの大きさや種類は区別していない）：

- 『プレジデント』（2018. 4.16号）：《最高の英語テキスト&アプリ、英会話スクール》2018 ランキング | たった1日、たった3語で話せる最新！「英語」の学び方 | 編集部員も効果実感！| TOEICレベル別「100点アップレッスン」付き
- 『プレジデント』（2017. 4.17号）：《最高の英語テキスト・英会話スクール》2017ランキング | 世界が証明 1500単語で大丈夫！「中学英語」でペラペラ話す | トランプ大統領vs孫社長「世界一やさしい英会話」解明| TOEICレベル別100点アップ！ワンポイントアドバイス
- 『週刊ダイヤモンド』（2017.12. 2号）：金も時間も労力もかけない！日本人のための英語学習法 | 究極の省エネ英語 | 中学3年間を教科書でおさらい | スマホ3分ITツール活用法 | 3語の英語 S + V + O で簡潔に
- 『週刊ダイヤモンド』（2016.12.10号）：商社マン50人が明かす門外不出の「英語」習得法 | 商社の英語 門外不出のサバイバル習得法 | 商社、物産、住商・・・6大商社が明かす30通りの勉強法 | 双日体育会軍団TOEIC®300点からの逆転ホームラン | ビジネスで使える！「キメ」単語&メールテンプレート| 語学エリート厳選 間違いのないスクール&教材
- 『週刊東洋経済』（2017.1. 4号）：電車でトイレで5分が効く！すき間時間の徹底活用術 | 目からウロコのカタカナ発音法 | AIでサクサク英語仕事術 | 即効英語 | 最短時間で最大効果 | 英文メールを1カ月でマスター | 例題つき新TOEIC完全対策 | カリスマ安河内先

生「本気で話したいならE-CAT」

- 『週刊東洋経済』(2016. 1. 9号)：すぐ役立つ文例&表現305 | ココを重点強化で新TOEIC200点アップ| 試験内容が変わる！新TOEIC対応 | 今年こそ！英語 | 50ページ大特集 会話, 文法, メール, 決算書, プレゼン, 商談で差をつける | 電話, 会議, オフィス…シーン別お役立ちフレーズ88 | 納得スマホアプリ26選
- 『日経ビジネスアソシエ』(2016. 3.10号)：新・英語の学び方| 新TOEIC予想問題も！| もう挫折しない！新・英語の学び方 最短&楽勝| 新TOEIC NHK英語 日常英語を完全カバー！| 出題形式が変更！「新TOEIC予想問題」を公開！| 孫正義・カリスマ講師安河内哲也の英語術
- 『日経ビジネスアソシエ』(2015. 7.10号)：1週間で身につく！英語 夏期集中講座 | 特集連動付録 1週間で学べる こんな時, 英語でどう言う？必須フレーズ集222 | ついに開講！中学英語×1週間 スキル別「独自カリキュラム」で学ぶ英語 夏期集中講座 | この夏こそ, 英語をモノにする！

欧米（そして韓国）企業の場合、採用する際も海外派遣する場合も語学力のある人材を選ぶことが常識となっているのに対し、日本企業は現地語がカタコトな男性社員を海外駐在員に選んでいる（Kobayashi, 2013, 2018c；Sunaoshi, 2005）。小林（2018）で紹介したノンフィクション作品『プライベートバンカー カネ守りと新富裕層』（清武 英利, 2016）の主人公・杉山もそのひとりである。野村証券、三井住友銀行、フランス系信託銀行と次々とキャリアアップさせているわりには「海外経験も語学能力も持ち合わせていなかった」し、シンガポール銀行のプライベートバンカーとしてヘッドハントされた際も「なぜ、英語の不得意な僕にこんな待遇を？」（基本給約1,350万円）といぶかしんでいる。しかしボスとなる先方の返事は簡潔だった：「大丈夫だ。英語が堪能な日本人アシスタントを付けるから。しゃべれなくても、書類を読めなくても、スタッフがうまくやってくれるよ」（pp. 32-33）。「中村咲子」がその杉山のアシスタントになったわけだが、彼女たちはプライベートバンカーたちの代理として、彼らのクライアント（脱税目的で逃亡中の富裕層たち）を「接待」することが重要な仕事になっている。アメリカの企業でOLをする元翻訳家の蓬田も同じような海外組の日本女性たちである（篠田 節子, 2000）（ただし、中村咲子はシンガポールで起業家として独立する道を進み始めている）。

これまで概観したように、日本人女性による積極的な英語学習投資に対する海外研究者の関心の高さと対照的に、男子大学生たちの消極的な英語学習態度への関心はほとんどない。その理由としてまず、外国語学習を推奨する立場にある（ひとが多い）人文系研究者たちにとって、英語学習意欲も英語力も低い男子学生たちが就職で全く不利にならないという事実と向き合うことに抵抗があるのかもしれない。そして大学人文系学部では英語学習に積極的な女子学生たちが大半を占めるため、研究者の所属学部を研究場所を選ぶと必然的に研究参加者が女性ばかり、ということになる。またすでに指摘したように英語圏での語学研修に自主的に参加する日本人学生の大半は女子学生のため、そういう場所で男子学生たちを見つけることが難しい。実際に筆者は男性限定の調査をカナダ語学学校で試みた際にこの問題に直面し、十分な日本人男性参加者を確保できずに予定していたアンケートは行えず、インタビュー調査のみとなってしまった（Kobayashi, 2012）。

ドラマに登場する「英語に投資する日本の女性たち」

ここからはNHK連続ドラマ「花子とアン」とNHK「国際共同制作ドラマ」「Oh Lucy!」を紹介しつつ、小林(2018)と文献を踏まえ日本人女性と英語学習の関係について考察をしていく。

NHK連続ドラマ「花子とアン」

寺沢(2015)は6章にて、日本女性の英語熱は黒船来航時代に遡るという「きわめて荒唐無稽」で「偏見に満ちている」津田(1993)による主張(p.122)を紹介し、「津田の「女性の英語崇拜」論のように、女性が歴史的に一貫して英語好きであったかのような記述は疑わしい」としている(p.123)。寺沢(2015)のデータ分析は「はたして女性は戦後一貫して「英語好き」だったのか否か」(p.123)という点の検証を目的としているため、戦前やそれより前の明治維新の頃のについての議論はないが、データ分析の結果、戦後から1980年頃までは英語学習は主に男性主流の活動であり、また英語学習をする女性たちは「若年層で高学歴・ホワイトカラー職・都市居住」の女性たちに限定されていたことを明らかにしている。

確かに戦後でも大学進学を出来る女子は「若年層で高学歴・ホワイトカラー職・都市居住」の女性たちに限定されており、東京にある私立女子大学にて英語や英文学を学ぶことが出来るようなお嬢様たちは「日本女性」全体の中では一握りの女性たちであった。NHK朝の連続テレビ小説として2014年前期に放送された「花子とアン」の主人公「花子」を思い出してみたい。「花子」こと村岡花子氏はAnne of Green Gables (Lucy Maud Montgomery著)を『赤毛のアン』として1954年に出版することになるが、その生まれは山梨の田舎の極貧の家庭であった。しかしわが子の才女ぶりに気づいた父の奮闘により10歳の時に東洋英和女学校に編入学でき、特権階級のお嬢様たちに交じって英才教育を受けたことで高い英語力を修得した。花子の英語力向上はその同級生の中でも卓越していたようで、「本科4年生(15歳)になる前後からは、18～19世紀の英米文学を片っぱしから読み尽くしていった」とある(村岡, 2011, p. 72)。

NHKドラマは村岡氏の生涯を描いた「アンのゆりかご」(村岡 恵理, 2011)を基に脚本化されているため多少の誇張や歪曲があるが、当時の女学生たちたちが例外的に恵まれた存在であり、学校を取り囲む高い塀の外側で暮らす大衆たちとはかけ離れた生活を送っていたという点は事実であろう。第10話「エーゴってなんぞら？」で描かれているように、女学校入学当時の花子(「オラ」)にとっても日本中の一般庶民にとっても「エーゴ」は見たことも聞いたこともない代物だった。当然のことながら寺沢(2015)が「きわめて荒唐無稽」と評したように、日本女性の英語熱は黒船来航時代に遡るという津田氏の主張は正しくない。

なおドラマとは異なり、実際は家族とともに花子は5歳で上京し、城南尋常小学校に通い始めている(村岡 恵理, 2011, p. 34)。そのため、花子が10歳で東洋英和女学校の予科1年生に「給費生」として編入学した際に甲州弁を話していた可能性は低い。「アンのゆりかご」の学校登校初日の場面でも花子は「これ、全部読んでもいいんですか？」(p.39)と「標準語」をしゃべっている。ただしドラマで描かれていたように、東洋英和の付属小学校卒業の同級生たちの高い英語力とは対照的に、「アルファベットの読み方さえ知らなかった」とあり(p.45)、「エーゴってなんぞら？」というレベルであったことは事実であろう。

時代は変わり、現在では「英語学習」はすっかり大衆化・商品化されている。日本中の一般大衆の女子学生たちが「英文学」を「学び」、外国人から「英会話」の授業を受けている。も

ちろん教育の大衆化はその質の大衆化も意味する。特権階級のための教育を受けたことで花子は15歳になる前には英米文学を原書で楽しめるようになり、ミス・ブラックモア（校長）のユーモアを交えた話を理解し、「要旨伝達」的に通訳する小林先生に対して「心の中で反問」するまでに達している（村岡 恵理, 2011, p. 74）。そのレベルに達することがまれである現代の「英文学専攻生」たちとの違いは大きい。しかしながら「エーゴってなんぞ？」という国民がいなくなり、地方出身者の女性でも都会の大学に進学することは「普通」になり、海外語学研修に気軽に多くの女子生徒・学生が参加しているという事実は驚くべき変化である。

変わっていないのは、華族令嬢たちと同様に、現在でも大卒の女性社会人は適齢期で結婚・出産して家庭を優先すべきという価値観と、社会人女性にとって語学は趣味や教養程度でいいという価値観である。当時でも東洋英和女学校で得た高い教養と英語力を生かして生涯英語のプロとして働き続けたのは「花子」くらいであったし、現在でも「英語で生きている」大卒女性は少ない。「英語で生きたい」女性たちに許されている選択肢はビジネス翻訳者や通訳者を目指すか、海外の日系企業の現地採用職に応募するか、それとも起業して自分が経営者になることを目指すか、といったところである（Kobayashi, 2015, 2018b）。そうした道を目指す日本女性たちがある程度いるからこそ通訳翻訳学校や海外就職斡旋業が成り立っているのだが、不安定要素の多い人生設計を貫き通し、生き続けていくことができる（できた）女性たちは首都圏に限られている（北村 文, 2011）。

実際、教育機関や英語産業界が謳うほど、「言語としての英語、文化としての英語を深く学び、世界に、そして未来に羽ばたいて」いく（某女子大学HP）女性たちへの社会的需要は高くない。青年海外協力隊日本語教師隊員への調査論文（平畑 奈美, 2016）によると、語学、特に英語を生かした職に就きたいという女性が多いが、その現実的な選択肢としては日本で英語教師になるか海外の企業で（現地採用されて）働くという選択肢以外にはあまりない。逆に日本語教師として働くという選択肢のほうが「エントリーポイントとして、入りやすい」（p.62）と調査参加者のひとりには語っている（20代後半女性、英語学専攻、在学中アメリカへの長期留学経験、大学院・英語学に合格するが辞退して青年海外協力隊に参加、帰国後、地球環境測定機器メーカーに正社員として就職, p. 53）。平松（2016）も「日本語は、むしろ英語よりも、より広い世界への扉を日本の若者たちに開く可能性を持っている」（p. 63）と指摘する一方で、その選択肢にアクセスできるのは「若年時に一定の教育資本（学歴、英語学習によって培われた言語や異文化への対し方等）を身につけていた人々」ではないか（p.63）、とも考察している。

「英語で生きる」ことや「英語で世界に羽ばたく」ことをあきらめた大多数の女性たちは仕事帰りか育児がひと段落した際に「女子力UP」や「オケイコ」目的に英語や韓国語など他の外国語と「楽しく」付き合っていくことになる（Bailey, 2007；Kobayashi, 2015, 2018b；Kubota, 2011）。そしてそうした女性たち向けの英語学習商品も世に溢れている。「花子とアン」放送の6年前の2008年4月から「NHKテレビ3か月トピック英会話」『『赤毛のアン』への旅～原書で楽しむAnneの世界～』が放送されているが、女優の松坂麗子氏とともにPE島でアンの生活を楽しみながら英語を学ぶ、というこの企画のターゲットはそうした女性視聴者たちであった。

日本人女性たちは白人英語ネイティブ男性にあこがれる、という見方

「英語学習は日本人女性にとって仕事に結びつかない教養でいい」、という見方が日本国内に根強くあるとするならば、海外で根強い見方は「英語学習は日本人女性があこがれる欧米社会

の代名詞である」というものであろう。海外研究者たちが「日本人女性の英語学習態度」について議論する際、必ずといっていいほど「白人英語ネイティブ男性」への「あこがれ」(akogare) というキーワードが登場する。そして必ず引用されるのがKelsky (2001) なのだが、簡単に言ってしまうと、「国際派日本女性」が「英語やそのネイティブスピーカーである白人男性に憧れをもっているか」聞いてみました、という内容である¹⁾。その結果、女性たちには男性優位の日本社会に対する不満があり、西洋・白人男性へのあこがれもあり、英語を自己表現とキャリアの武器として見ていた、ということが分かり、つまり「日本人女性たちは英語（を話す白人男性）に憧れを抱いている」という結論になっている。日本社会と日本人男性に対して不満を述べ、白人男性と関係をもつことに積極的な「国際派日本女性」たちの存在を記録したKelsky (2001) に対する海外研究者たちの評価は非常に高いが、その背景には「オリエンタリズム」(Said, 1979) という欧米社会に根強いアジア蔑視があるといっているであろう。

ケルスキーは自分の研究成果を振り返り、「日本を拒絶し欧米にあこがれる日本人女性」の存在を確認することで、自分が批判したかったはずの欧米社会にあるアジア蔑視観を助長してしまったのではないかと悩んだ、と述べている (Kelsky, 2001, p. 31)。ただ「ガイジン」男性との一夜を求めてハワイや六本木の街を出歩く日本人女性たちを「国際派」と呼び、そうした女性たちのみにインタビューをしたことについては後悔している様子はない。確かに「ガイジン好きな日本女性」以外についても短く言及してはいる：日本女性を性的対象としか見ない白人男性にうんざりしているという6名の女性たち (pp. 199-201)、白人との結婚や「ハーフ」の子供を産むことにあこがれていた自分がいかに愚かであったかと悟った10名程度の女性達 (pp. 213-217)。しかし研究テーマは「白人男性にあこがれる日本人女性」であり、その証拠として広告写真、TV CM写真、留学雑誌表紙、4コママンガなどを繰り返し紹介している。

類例として、久保田竜子氏による日本の英会話学校での長期調査がある。調査参加者の一人で、英会話学校経営者の日本人男性 (53歳) は、日本女性が白人男性との時間単位レッスンを求め、英会話学校に押し寄せる様子を水商売のホストクラブにたとえている。この結果は上記のケルスキーの研究同様、白人男性と関係を求める日本人女性イメージを海外の学者に思い起こさせるであろう。実際、久保田氏自身もケルスキーのように、お習い事として大して努力をしないまま英会話学校に通っている日本人女性たちを研究する「教育的」「学術的」意義があるのかどうか自問自答している (Kubota, 2011, p. 487)。

なお「日本人女性と英語」の間に何らかの関係があると考えられる研究者たちが調査対象者に選ぶのは英語学習投資に積極的な女性たちである。Kelsky (2001) の「国際派日本女性」たちに関して言えば、全員白人男性と関係をもったことがあり、六本木やハワイでそうした関係を期待する「イエローキャブ」と揶揄される相当少数派な女性たちである。しかし研究者たちはこうした日本人女性たちを特別視するわけではなく、英語にそれほど投資をしていないより多

1) 土台となっているフィールドワークは、ハワイ・ワイキキで実施した「イエローキャブ」についての調査 (1991年) と、東京・六本木などで実施した「日本人女性と白人男性」デート実態調査 (1993-1994年) である。ケルスキーは裕に20ページ以上を「イエローキャブ」現象と用語の説明に費やしている (主に134頁から)。その説明によると1980年代後半から1990年初頭、ハワイ、ニューヨーク、バリ島、在日米軍基地周辺そして東京・六本木界限などに、白人や黒人などの「ガイジン」男性との一夜を求め、札束を手にした日本人女性たちがやってくるようになった。こうした「イエロー」で「簡単に飛び乗ることができる」日本女性たちをアメリカ人男性たちが「イエローキャブ」と呼ぶようになった、とケルスキーは説明している。そして2000年に小説『イエローキャブ』を出版した家田荘子はその由来を誤解していると、ケルスキーは書いている。

くの日本人女性たちと区別せずに議論をしている感がある。

例えば北村（2011）は「外人好きのブス女」と非難されそうな日本人女性たちだけではなく、4年生大学に進学したり、やりがいや生きがいを見つけようとしている日本人女性たちも含めた女性たちが置かれた現状を悲観し、「なんてかわいそうな、日本の女たち」と評している。

さらにひどいことに、そういう女性たちを揶揄する声もまた日本のなかで小さくない。「留学とか英会話とか騒ぐバカ女」とか「外人好きのブス女」とかいういやな言い方も、ネット上にはあふれている。ここでさらに比喻をもちだすならば、日本の女性たちはおそろしい毒を口にしてしまい、深い眠りにしてしまった白雪姫だろう。それを目覚めさせるのは、彼女らが思い描くような白人のプリンスチャーミングではなく、大和魂を知る日本の男たちだということになるだろうか。彼女らがばかな夢をみるのをいつかやめて、ほんらいの日本女性という位置—大和撫子でも良妻賢母でもなんでもいいけれど—に戻っていくことを望み求める人たちがいる。なんてかわいそうな、日本の女たち。職業的な自己実現を期待されず、やりがいや生きがいも見つけられず、妻と母の位置に押し込められ、それがいやで抜け出そうとすれば、語学留学なんかして何になるとか、四年制大学を出ていてもウェイトレスの仕事しかないよと言われ、さらには誰にでもやらせちゃうイエローキャブなんでしょ、とまで言われ、夢から醒めようにももう退路さえない。救ってくれるというから救われようとしても、救われない。彼女らにはもはや、シンデレラや白雪姫のようなハッピーエンドは訪れないし、不思議な国のアリスのようにもといた場所に戻ることすらできないようだ。(pp. 38-39)

しかし大多数の日本人女性にしても少数派の英語学習投資組にしても、当人たちは「なんてかわいそうな私たち」と思っているのかどうかは不明である。そして彼女たちは日本の、または海外の（女性）研究者たちが自分たちのことをあれこれ言っていることについて気づいているのだろうか、そして気づいたとしてそのことを気にするだろうか、という点も不明である。もしかしたら研究者たちが思うほど自分たちを「かわいそう」とも「欧米や白人にあこがれている」とも思っていないのではないのか。そう思わせる例として「Oh Lucy!」というドラマ視聴者たちによるコメントがある。これらを見ながら、「かわいそうな日本人女性」とか「白人男性（社会）に憧れる日本人女性」という語りに対する一般日本人女性たちの共感度（の無さ）について考察したい。

NHK「国際共同制作ドラマ」「Oh Lucy!」

「Oh Lucy!」は最初に短編映画として2014年のカンヌ国際映画学生部門において日本人で初めて2位に入賞し、その後、その長編映画版が2017年にはカンヌ国際映画祭批評家週間部門とトロント国際映画祭ディスカバリー部門に出品され、2017年9月16日にNHK総合（夜9時から73分間）にて「国際共同制作ドラマ」として放送されている。映画監督は高校時代にロサンゼルス、大学はサンフランシスコ、大学院はアメリカの大学のシンガポール校に留学しその後アメリカ人男性と結婚しサンフランシスコを拠点に活動している日本人女性・平柳敦子氏である。NHKホームページではあらすじを以下のように紹介している。

孤独なひとりのOLが、英会話教室のアメリカ人講師との出会いをきっかけに、それまでとは違う生き方へと一歩踏み出していく：平凡なOL節子（寺島しのぶ）は、姪の美花

(忽那汐里)に頼まれ、怪しげな英会話学校の授業を受けることに。そこで出会ったのは、一風変わった教え方をするアメリカ人講師のジョン(ジョシュ・ハートネット)と、謎の初老の男性(役所広司)。節子はジョンに心惹かれるが、ジョンは美花を連れて突然アメリカへと帰ってしまう。節子は姉・綾子(南果歩)とアメリカに渡り二人を探すのだが、アメリカでは思わぬ事態が待ち受けている。

内容をさらに説明すると、冴えないOL生活を送る43歳の独身OL女性・節子(寺島しのぶ)は姉の綾子(南果歩)に彼氏を取られて以来何十年も、ゴミ屋敷と化した薄暗い古びたアパートの一角で何の楽しみもなく過ごしている。が、姪の実花(忽那汐里)に懇願され、あやしげな英会話学校で無料体験レッスンを受けることになる。そこで働く白人英語教師ジョン(Josh Hartnett)にいきなりLucyという名前と金髪のかつらという「アメリカ人」アイデンティティセットを与えられ、「アメリカ式」の挨拶とハグ(抱擁)を練習させられる。同じように「アメリカ人」かつらとTomという名前を与えられた日本人男性(役所広司)にも会う。思いがけずそのレッスンが気に入った節子は60万円を投じて英会話学校に通うことを決意する。仕事帰りのジョンとのレッスンとハグを重ね、新しい自分に気づき始め彼にひかれていくが、彼は突然メイドカフェで働いていた姪の実花と一緒にアメリカに帰国してしまう。彼を追いかけるために会社に休暇願を出し姉と渡米する。現地では彼が実花と一緒にしたように自分も腕に「愛」のタトゥーをいれ、彼の部屋に押しかけ告白をしたり、性行為を迫ったり、自分には金があるなどと訴える。しかし妻も娘もいる上に実花に未練があるジョンは、病的な行動をとる節子を突き放す。さらに節子がジョンとの一方的な性行為を実花に暴露したとたん、実花は崖から身投げしてしまう。九死に一生を得た実花、姉、ジョンから突き放された節子は日本に戻り、最初から居場所がなかった会社に辞表を出す。大量の薬を飲んで自宅で倒れているところを日本人男性「Tom」(役所広司)に救ってもらう。自殺で息子を亡くしているという「Tom」と二人で電車のホームでハグし合っているところでエンディング、というストーリーである。

「白人男性好きの日本人女性」像への女性視聴者からの反応

NHK総合テレビで夜9時というゴールデンタイムに放送されたこの作品に対し、新聞にもネットにも同世代らしい女性が多くコメントを投稿している。Girls Channelには2017年9月16日の放送終了直後から9月28日までの間に147件のコメントが投稿されている。しかし「白人男性好きの日本人女性」像を意識したコメントは以下の2件のみであった：

「もう、イエローキャブ丸出しでハズイわ。そりゃあもう怖いって。いきなりタトゥーまでしてアイレビューなんて言われた日にゃあ。」

「外国人から見る日本人ってあんなイメージなんだらうね。まるで映画を見てるかのようなドラマでした。」

逆に多かったコメントは職場にも社会にも居場所がない中年独身女性・節子に「明日は我が身」と感情移入した同世代の独身女性たちからのものだった。

「普通の人の狂気」だよね。最後のほうは寺島しのぶのほうに感情移入してしまってる自

分に気づいて怖い。』

「43歳，独身，物を捨てられない汚部屋…明日は我が身ってことで周りの人に感謝して 大事にしようって心から思った」

「(略) 生々しいストーリーに自分と少しリンクしたり，アラフォーの私に刺さりました。拗らせ気味の自分，明日は我が身... (略)」

「(略) 同じ年頃で独身で汚部屋で事務員で…あまりにも自分そのものすぎて引いた。会社も辞めて欲しいと思ってんだろくなあ。中年女の貧困が増えてるってわかる気がするわ！ やっぱり結婚できるって勝ち組なんだろくなあ」

「(略) みなさんの感想読みながら頷いたり共感したり，とても良作でした。独身46才一人暮らしだからよけいかな。(略)」

「46歳，独身。私も自分の明日からが少し怖くなった。今，好きな人すらいないから，恋をすることすら怖いと思ってしまった。物であふれる部屋と，寂しさからクソ男のジョンを愛してると思いこんでしまった節子を切なくて，怖くて，かわいそうで複雑な気持ちでみておりました。(略)」

「居場所も存在価値も見出せないような会社での面白みのない仕事，平凡で退屈で酒と薬だけが支えの日々。寂しさを埋めるように誰かを想い求めて舞い上がり勘違いし傷付き自己嫌悪に陥る。自意識過剰を思い知らされたり，若さに嫉妬したり，劣等感があつたり，ひとりの独身女性の本当に生々しい物語だった。」

若い女性（であろう）投稿者の「何が言いたいかわからなかった」というコメントに対し，中年女性の投稿者は次のように書き込みをしている：

「何が言いたいのかわからないドラマとを感じるってことは，あなたが今，孤独で寂しくはないからか，若いからかなーと思う。違ってたらごめんなさい。同年代，独身だと自分は違うよねと思いたくなる。やりすぎかと思うようで，実際，あり得るかもと考えてしまうようなシーンあったよ。(中略) 中年で孤独な女性（私）は，何か踏み外したら節子の部分が表れるかと思ひながらみてました。」

中年独身女性たちの孤独感と焦燥感に対し，若い女性たちからはそうした「おばさん」たちのコメントを読むことでドラマをより理解できたとか，そもそも感情移入が出来なったというコメントが投稿されていた：

「こじらせおばさんこわいよ～ でも飢えた中年女がイケメン外国人にハグされたらまあ好きになっちゃうよね。そっからの暴走がこわいけど。」

「今，録画見た。そうか。皆の解説を見ていろいろ理解した。おばさん怖ッって思ったん

だけど、いろいろ深い心理が描かれているんだね。思い通りにならない人生には共感出来たけど、男絡みと肉親とのイザコザの話は全く異次元だと思ったのは私の経験しない状況だからなんだな。」

他のレビューサイトをみても明らかに男性と分かる投稿者からのコメントはなく、視聴者の多くが女性であったことがうかがえる。Yahoo映画に投稿された3名のコメントのうちひとつは「モラルがない」独身女性・節子を冷淡に突き放しているが、その「オリエント女が尻軽すぎ」という見方こそが、女性研究者たちに言わせると日本人男性や欧米社会の間で浸透している「日本女性」イメージである、ということになる。

「一見普通の人たちなんだけど、なんかどの登場人物もおかしい。面白いという意味ではなく、感覚がずれている、モラルがない。独身女性の悲哀が醸し出されるのが狙い？モラルもない嫌な女だと思う。「独身女性≒やっかいでイケズ」の定義でも植え付けたいのか。会話が面白いと思って観ていたがなんとも後味が悪い。会話に耳を傾けるために音楽がないのか。それでも会話のテンポは良かったように思えた。カンヌで評価されたとしたら「異国の女の話」として異国なのに共感できてオリエント女が尻軽すぎて面白く、なんでそこまで軽いのかよくわからない部分ではないかな。」(2017年9月17日)

確かに「女性の英語崇拜」論(津田 1993)もあるし、北村(2011)が言うように男性たちがネット上で「留学とか英会話とか騒ぐバカ女」とか「外人好きのブス女」をバッシングすることも少なくないのかもしれない。また欧米社会でもそういう「かわいそうな」または「軽い」「オリエント女」像は根強いことは否定できないのだろう。しかし、そうした見方を当の日本人女性たちがどの程度知っているのか、そもそも気にするのか、という点についてはまだ調査されていない。前述したようにKelsky(2001, p. 31)は自分の研究が「日本に不満を持ち、欧米にあこがれる日本人女性」ステレオタイプを助長してしまったのではないかと述懐し、Kubota(2011, p. 487)は趣味で英会話を「学ぶ」日本人女性たちを研究することに「教育的」「学術的」意義について悩んだ、と書いている。しかし、そうした女性研究者たちの悩みを調査対象者である女性たちが共感するかどうか、つまり研究者と調査対象者たちの間の心理的距離感については不明である。

白人男性しかいないアジアの英語学習教室

さらにここで指摘したい点は、単身で日本にやってきてあやしげな英会話学校で働いているジョンについて何の説明がなくても違和感がないほど、白人男性が日本の英会話学校で働いているという状況は日本中で当たり前である、という点である(Kobayashi, 2014)。そもそも欧米英語圏でもフィリピンなどの準英語圏でも英語学校講師の大半は女性なのに、なぜ日本やアジアで働く「白人英語ネイティブ講師」は男性ばかりなのか。白人女性たちは何らかの理由で排除されているのか。これらの疑問は重要である。何故なら、本当に白人男性目当ての日本人女性たちが多ければ、日本中のオンラインやリアル英会話学校で働く講師の多くが白人女性になった時点で日本人女性たちは英会話学習への投資を辞めてしまったり、がっかりする可能性が高い、ということになる。しかし日本の英会話教室にしても、スカイプ画面に映るオンライン英語講師にしても、海外語学学校教師にしても、「ネイティブ講師」が白人女性だったという理由で日本人女性たちが学習を辞めたとか、不満を訴えたなどは聞いたことがない。

実際最近ではフィリピン人女性英語講師によるオンライン英会話もその低価格さと気軽さゆえに利用者は増えている。筆者も10年以上にわたり欧米英語圏語学学校で調査をし続けてきたが、講師の大半が（白人）女性であったから日本人女性がかかりしたという話は現地関係者、研修引率大学教員、日本人女子大学生たちのいずれからも聞いたことがない。

近年、白人英語ネイティブ女性研究者たちを中心として、日本における白人英語ネイティブ男性の絶対的優位を批判する論文が発表されるようになってきている（Appleby, 2013, 2014, 2016；Hayes, 2013；Hicks, 2013）。しかしながら日本やアジアで働く「白人英語ネイティブ講師」は何故欧米で「男尊女卑社会」として有名な東アジアを目指すのか、何故自国で第二外国語としての英語教師という道を選ばなかったのか、などの疑問点については語りたがらない男性が多いようで、彼らに対する理解はまだ限定定的である。

日本では英会話学校でも教育機関でも英語ネイティブ教師として雇用されているのは白人男性ばかりであり、彼ら以外の「英語ネイティブ」教師という選択肢がほとんどない状態である点は無視したまま、そうした環境で自主的に英語を学んでいる女子学生たちは「白人男性への *akogare*があるのだ」とか「日本人男性社会から（一時でも）脱出したいのだ」、という議論だけが続いている（Bailey, 2007；Kelsky, 2001）。欧米・海外の研究者たちにとっては「白人男性に恋い焦がれる」『蝶々夫人』（マダム・バタフライ）に通じるオリエンタル女性像が理解しやすいのかもしれないが、そうした「白人男性好きの日本人女性」という見方が日本人研究者たちにも浸透しきっていているところにオリエンタリズムの根深さがある。

今後の「日本人女性と英語」研究展望

小林（2018）では、「小説に登場する「英語（圏）生きていきたい日本女性たち」として、2冊の小説を取り上げた（篠田 節子, 2000；清武 英利, 2016）。そして本稿ではNHK連続TVドラマ「花子とアン」とNHK放送「国際共同制作ドラマ」「Oh Lucy!」をさらに概観した。これらの作品内容を踏まえると、現代日本人女性と英語の関わり方については少なくとも3つにまとめることが出来るだろう：

- (1) 「英語をいかした職業」に転身することで長く日本で働き続けようとする女性たち（例：日本企業の中でのOL寿命は短いことをよく悟ったうえで、「ビジネス文書の翻訳スペシャリスト」なるという夢を目指していたが、挫折を繰り返し渡米した『わたちのジハード』の沙織；『わたちのジハード』の渡米前の蓬田）
- (2) 海外就職に活路を見いだそうとする女性たち（例：翻訳では生きていけないことを悟り、渡米して転職したが日本のOL時代と変わらない仕事をしている『わたちのジハード』の蓬田；地方出身で事務職経験ゼロながら、シンガポールへ単身渡航し、起業やさらなる転職を考えている『プライベートバンカー カネ守りと新富裕層』の中村咲子と佐藤敦子）
- (3) 英語を趣味として学びながら日本での生活の中で居場所を探そうとする女性たち（例：生きがいも居場所もないまま英会話学校に通い始める「Oh Lucy!」の中年独身OL・節子）

そしてこれらの選択肢とは別に、「英語で生きる」ことをあきらめて日本語教師に転向する女性たちもいる（平畑 奈美, 2016）。一見すると、女性たちの選択肢が増え良いことのように

みえる。実際、NHK朝の連続ドラマ「花子とアン」が描いたほんの数十年前の日本では女性どころか一般大衆男性でさえ「英語」は聞いたことも習ったこともない高い壁の向こうのものだったが、今では会社帰りのOLたちが翻訳学校や英会話学校に通ったり、女性磨き・ご褒美として夏休みのプチ語学留学や海外旅行を楽しみにできる時代になっている。そして今の時代なら人生転換の余地も大いにある、と女性雑誌や英会話産業などが盛んに背中をおしてくれる(Kobayashi, 2015, 2018b)。しかしいずれの選択も男性社会を壊さないよう、その周辺側に留意された女性限定または女性向けの英語空間である(Kobayashi, 2015, 2018b)。

大学で自主的な英語学習投資をするのは女子学生が圧倒的に多いが、彼女たちが就職先で与えられる役割は男性社員たちのサポート役であり、しかも長く勤め続けることは期待されていない(シンガポール銀行/『プライベートバンカー』の中村咲子と大手火災保険/『女たちのジハード』の沙織のように)。せっかくMBA留学して帰国しても、男性たちのように企業からグローバル人材として採用されるという見込みは低い。そのため留学経験者の女性の間では「セカンドベスト」の選択肢として自ら起業する割合が高くなる(西尾 亜希子, 2012)。海外に活路を見いだそうとしても、女性たちは大抵現地の日系企業や日系企業と取引のある企業に就職することになり、モノリンガルな日本人ビジネスマンたちやクライアントたちのお世話をさせられることになる(『女たちのジハード』の蓬田と『プライベートバンカー カネ守りと新富裕層』の中村咲子のように)。つまり、昔よりも選択肢は広がっているように見えるが、彼女たちの役割と居場所は社会でも家庭でも海外でも男性のサポート役、端の方であることには変わりはない。また日本人男性の影響が及ばないところに移り住んだとしても、海外では「外国人移民女性」として日本と同じく社会の周辺部に位置づけられてしまい、まともな就職はできず、結局は現地男性の妻として専業主婦をするしかない、という報告もある(Kawakami, 2009)。

では今後数十年後も女性たちは相変わらず男性中心社会から提供された英語との付き合い方を社会の端で実践していることになるのだろうか。それともその付き合い方は大きく変わる可能性はあるのだろうか。今後日本の国際競争力が悪化すれば、日本企業もモノリンガルの日本人男性を雇っている余裕がなくなっていくかもしれない。そして今の韓国のように少なくとも「グローバル」企業への就職には使える英語力(があることを証明すること)が必須となり、男子学生たちの英語学習への切迫感が増すかもしれない(Kobayashi, 2018c)。そうなれば、(女性)通訳者のニーズは減り、求められる専門性が高くなり、今の日本のOLが会社帰りに通訳学校に通いながら目指すことができる職業ではなくなるかもしれない: 実際、韓国では1979年に東アジアで初めて通訳翻訳大学院を設立するなど通訳翻訳士に求める専門性は非常に高かったが(金 静愛, 2008)、韓国人の英語圏留学率と英語力が上がっていく中で、通訳者に求められる英語力がさらに高くなってしまい、通訳翻訳大学院の在籍者と卒業生たちの焦りは高まっている(Cho, 2017)。どの時代も将来は予測不可能であるが、国際競争が今後ますます激化していくことと日本の経済的地位が保障されていないことは確かである。すると、「日本人女性が英語に抱くあこがれ」という研究テーマが今後どのくらい持続するのか、ということ自体がおもしろいテーマになっていくのかもしれない。

参考文献

- Appleby, R. (2013). Desire in translation: White masculinity and TESOL. *TESOL Quarterly*, 47 (1), 122-147.
- Appleby, R. (2014). *Men and Masculinities in Global English Language Teaching*. New York: Palgrave Macmillan.
- Appleby, R. (2016). Researching privilege in language teacher identity. *TESOL Quarterly*, 50 (3), 755-768.
- Bailey, K. (2007). Akogare, ideology, and 'Charisma Man' mythology: reflections on ethnographic research in English language schools in Japan. *Gender, Place and Culture*, 14 (5), 585-608.
- Ben-Ari, E., & Vanessa, Y. Y. F. (2000). Twice marginalized: single Japanese female expatriates in Singapore. In J. Clammer & E. Ben-Ari (Eds.), *Japanese Presences in Singapore* (pp. 82-111). London: Curzon Press.
- Carr, J., & Pauwels, A. (2006). *Boys and Foreign Language Learning: Real Boys Don't Do Languages*. New York: Palgrave.
- Cho, J. (2017). *English Language Ideologies in Korea: Interpreting the Past and Present*. Cham: Springer.
- Clark, S. (2006). Maintaining Yoshino's traditional hierarchy: the roles of gender and race in Japanese transplant management. *Journal of Organizational Change Management*, 9 (3), 6-17.
- Ehrlich, S. (2001). Gendering the learner: sexual harassment and second language acquisition. In A. Pavlenko, A. Blackledge, I. Piller & M. Teutsch-Dwyer (Eds.), *Multilingualism, Second Language Learning, and Gender* (pp. 103-129). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hayes, B. E. (2013). Hiring criteria for Japanese university English-teaching faculty. In S. A. Houghton & D. J. Rivers (Eds.), *Native-Speakerism in Japan: Intergroup Dynamics in Foreign Language Education*. (pp. 132-146). Bristol: Multilingual Matters.
- Henry, A., & Apelgren, B. M. (2008). Young learners and multilingualism: a study of learner attitudes before and after the introduction of a second foreign language to the curriculum. *System*, 36 (4), 607-623.
- Hicks, S. K. (2013). On the (out) skirts of TESOL networks of homophily: Substantitive citizenship in Japan. In S. A. Houghton & D. J. Rivers (Eds.), *Native-speakerism in Japan: Intergroup Dynamics in Foreign Language Education* (pp. 147-158). Bristol: Multilingual Matters.
- Iwao, S. (1993). *The Japanese Women: Traditional Image & Changing Reality*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Kawakami, A. (2009). From an "international woman" to "just another Asian immigrant": Transformation of Japanese women's self-image before and after permanent settlement in a Western country. *Journal of Identity and Migration Studies*, 3 (2), 22-39.
- Kelsky, K. (2001). *Women on the Verge: Japanese Women, Western Dreams*. Durham: Duke University Press.
- Kobayashi, Y. (2002). The role of gender in foreign language learning attitudes: Japanese female students' attitudes towards English learning. *Gender and Education*, 14 (2), 181-197.
- Kobayashi, Y. (2007). Japanese working women and English study abroad. *World Englishes*, 26 (1), 62-71.
- Kobayashi, Y. (2012). Working adults' (un) willingness to study L2: preliminary findings and research issues. In H. Pilay & M. Yeo (Eds.), *Teaching Language to Learners of Different Age Groups (Anthology Series 53)* (pp. 218-227). Singapore: SEAMEO RELC.
- Kobayashi, Y. (2013). Global English capital and the domestic economy: the case of Japan from the 1970s to early 2012. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 34 (1), 1-13.
- Kobayashi, Y. (2014). Gender gap in the EFL classroom in East Asia. *Applied Linguistics*, 35 (2), 219-223.
- Kobayashi, Y. (2015). 'Women's power goes up with language study': Japanese women's magazine construction of ideal female adult learners in gendered Japan. In A. Jule (Ed.), *Shifting Visions: Gender and Discourses* (pp. 138-154). Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- Kobayashi, Y. (2018a). Chapter 5: Japanese (fe) male learners' (un) motivation in overseas ESL contexts. *The Evolution of English Language Learners in Japan: Crossing Japan, the West, and South East Asia* (pp. 61-79). London and New York: Routledge.
- Kobayashi, Y. (2018b). Chapter 8: Japanese women's magazines' articles about English study: a window on Japanese women's status in the business world. *The Evolution of English Language Learners in Japan:*

- Crossing Japan, the West, and South East Asia* (pp. 116-131). London and New York: Routledge.
- Kobayashi, Y. (2018c). The neo-liberal notion of global language skills vs. monolingual corporate culture: co-existence or rivalry? *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 39 (8), 729-739.
- Kubota, R. (2011). Learning a foreign language as leisure and consumption: enjoyment, desire, and the business of *eikaiwa*. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 14 (4), 473-488.
- Ono, H., & Piper, N. (2004). Japanese women studying abroad, the case of the United States *Women' Studies International Forum*, 27, 101-118.
- Park, H. (2010). The stranger that is welcomed: Female foreign students from Asia, the English language industry, and the ambivalence of 'Asia rising' in British Columbia, Canada *Gender, Place and Culture*, 17 (3), 337-355.
- Philp, M. (2001, 22 September). Asia is here. *The New Zealand Listener*, 18-22.
- Said, E. W. (1979). *Orientalism*. New York: Vintage.
- Sakai, J. (2000). *The Clash of Economic Cultures: Japanese Bankers in the City of London*. New Brunswick (USA) and London (UK) : Transaction Publishers.
- Sunaoshi, Y. (2005). Historical context and intercultural communication: interactions between Japanese and American factory workers in the American South. *Language in Society*, 34, 185-217.
- Talburt, S., & Stewart, M. A. (1999). What's the subject of study abroad?: race, gender, and "living culture". *Modern Language Journal*, 83 (2), 163-175.
- Thang, L. L., MacLachlan, E., & Goda, M. (2002). Expatriates on the margins—a study of Japanese women working in Singapore. *Geoforum*, 33, 539-551.
- Twombly, S. B. (1995). Piropos and friendships: gender and culture clash in study abroad [Electronic version]. *Frontiers: the Interdisciplinary Journal of Study Abroad* 1, 1-27.
- Williams, M., Burden, R., & Lanvers, U. (2002). 'French is the Language of Love and Stuff': Student perceptions of issues related to motivation in learning a foreign language. *British Educational Research Journal*, 28 (4), 503-528.
- 金 静愛 (2008). 韓国における通訳翻訳教育—韓国外語大学通訳翻訳大学院の場合—. *通訳翻訳教育*, 8, 355-369.
- 寺沢 拓敬 (2015). 「日本人と英語」の社会学—なぜ英語教育論は誤解だらけなのか. 研究社.
- 篠田 節子 (2000). *女たちのジハード*. 集英社.
- 小林 葉子 (2018). 小説に登場する「英語 (圏) で生きたい日本人女性たち」(1). *岩手大学人文社会科学部 紀要* 102, 85-102.
- 清武 英利 (2016). *プライベートバンカー カネ守りと新富裕層*. 講談社.
- 西尾 亜希子 (2012). なぜ女性社長には留学経験者が多いのか—女性社長の生き方に学ぶ—. *留学交流 (JASSO ウェブマガジン)*, 14 (5), 1-14.
- 村岡 恵理 (2011). *アンのゆりかご*. 新潮社.
- 津田 幸男 (1993). 英語支配への挑戦序論 (『英語支配へ異論—異文化コミュニケーションと言語問題』第三書館).
- 平畑 奈美 (2016). 「英語が使える日本人」のグローバルキャリア構築—「英語学習」から「日本語教育」へのライフヒストリー. *言語学習と教育言語学 (日本英語教育学会・日本教育言語学会合同編集委員会編)*, 47064.
- 北村 文 (2011). *英語は女を救うのか*. 筑摩書房.